

漢法苞徳塾資料	No. 106
区分	治療論・鍼法(入門講座)
タイトル	刺鍼原則
著者	八木素萌
作成日	1990.11.23

## ◎五臓に應ずる刺法について

- a. 『素問』調經論第 62 の記述から
- b. 『素問』五蔵生成第 10 の記述から
- c. 『素問』診要經終論第 16 の記述から

「正月二月 天氣始方 地氣始発 人氣在肝 三月四月 天氣正方 地氣定発 人氣在脾  
五月六月 天氣盛 地氣高 人氣在頭 七月八月 陰氣始殺 人氣在肺 九月十月 陰氣  
始冰 地氣始閉 人氣在心 十一月十二月 冰復地氣合 人氣在腎 故春刺散俞 及与分  
理 血出而止 甚者伝氣間者環也 夏刺絡俞 見血而止 尽氣閉環 痛病必下 秋刺皮膚  
循理 上下同法 神変而止 冬刺俞竅 於分理 甚者直下 間者散下～」

## 註文に

- ◇「方者正也言天氣正発生其万物也」
- ◇「天氣正方以陽氣明盛 地氣定発 万物華而欲実也」
- ◇「天陽赫盛地焰高升 故言天氣盛地氣高火性炎上故人氣在頭也」
- ◇「散俞謂間穴分理謂肌肉分理 新校正云按四時刺逆從論云春氣在經脈此散俞即經脈之  
俞也 又水熱穴論云 春取絡脈分肉」
- ◇「尽氣謂出血而尽鍼下取所病脈盛邪之氣也 邪氣尽已穴俞閉密則經脈循環而痛病之氣  
必下去矣」
- ◇「新校正云按四時刺逆從論云 夏氣在孫絡此絡俞即孫絡之俞也 又水熱穴論云 夏取  
盛經分腠」
- ◇「循理謂循肌肉之分理也 上謂手脈下謂足脈 神変謂脈氣変易与未刺時異也 脈者神  
之用故爾言之」
- ◇「新校正云按四時刺逆從論云 秋氣在皮膚義与此合也 又水熱穴論云 取俞以瀉陰邪  
取合以虚陽邪 皇甫士安云 是始秋之治変」
- ◇「直下謂直爾下之 散下謂散布下之 新校正云 按四時刺逆從論云 冬氣在骨髓此俞  
竅即骨髓之俞竅也 又云水熱穴論云 冬取井榮 皇甫士安云 是末冬之治変也」な

どとある。

◇これは、「気之所在」を「刺す」の原理を記述するものである。『素問』四時刺逆從論第 64、『素問』水熱穴論第 61 と『甲乙經』の記述が重要な意味を帯びている事が判かる。『難經』の「七十四難」を軸にした記述とは「四季」に取る「穴」に相違がある。対比して検討すべきものである。

d. 『素問』診要經終論第 16 の記述より

月日	1-2	3-4	5-6	7-8	9-10	11-12
在人氣	肝	脾	頭	肺	心	腎

春刺……散俞 及與分理 血出而止。甚者傳氣 問者環也。

夏刺……絡俞 見血而止 尽氣閉環 痛病必下。

秋刺……皮膚循理 上下同法 神變而止。

冬刺……俞竅於分理 甚者直下 問者散下。

註

散俞：間穴の事・肌肉の分理の事。『素問』四時刺逆從論第 64 には春気は経脈にありという・また、王冰註のように「此の散湯は即ち経脈の俞なり」「水熱穴論は春は絡脈の分肉に取る」という。

分理：理は腠理の理である。王冰のように「肌肉の分理」と見る者、「絡脈の分肉」とするものなどがある。とするならば三～四通りの解釈があるということである。臨床的な観測の蓄積とそれの解析が必要であろう。

絡俞：「孫絡乃」で「夏気が在るところ」と『素問』四時刺逆從論第 64 が言い、『素問』水熱穴論第 61 では「夏は盛経の分腠に取る」と記述していると註されている。

◎十二經に応ずる刺法について

◎病症に応ずる刺法について

五臓に応ずる刺法、十二經に応ずる刺法、痺に対する刺法、九変に応ずる刺法、などの原則的な記述を学べば、あらゆる場合に対応するトータルな刺法の原理的なものが、運用できることになるのである。

『素問』鍼解第 54、『素問』調經論第 62、『素問』離合真邪論第 27、『素問』繆刺論第 63、『素問』刺腰痛第 41、『靈樞』官鍼第 7、『靈樞』終始第 9、『靈樞』熱病第 23 など他に学ぶべし。